



深い造詣とわかりやすい内容

「集団精神療法の理論と実際」

国立精神衛生研究所 池田 由子 著

集団精神療法を系統だてて実践している病院はまだ数に限りがあり、そのために理解する上で混乱や自己流の解釈がなされている現状である。本著はこうした時にオーソドックスな理論と実際を紹介したことで意義深い。

特徴としては、広く歴史・発達からさかのぼり現代に及ぶこと、ぼう大な参考文献を読破されそれらをあげていること、対象が精神病だけでなく児童や母親も取り上げたこと、実例の数が多く正確に記載され、その上に適切な解説・説明が加えられていること、なによりも読みやすい文体で、読者を思わず引きつけることである。

読後の感想ではセラピストとして、① 自分自身の心の動きに対する洞察力を持てる、② 患者個人対セラピストで対応する時の注意すべき点、③ その患者が集団の中にはいった時に表わす変化とその理由づけ、など特に学ぶべき所があった。

なんの注意もなくセラピストは患者をこちらの判断の規準にのせ、集団または障害別に治療してしまう危

険をもっている。そして心の中ではなんとなく患者中心という言葉をくり返してはいる。しかし現実の場面では、忙しさと患者数が多いのとのかいり合理化を使ってしまっていることがある。

ある患者はいつも不平ばかりいう。ある患者はわざとセラピストを困らせる。そしてある患者は、口では協力するようなことをいい、しかし全然治療にはのってこない。なぜなのであろうか。

患者は患者の1人ひとりの政治的・社会的・文化的・家庭的背景の差と個人の持つニーズとその表現の違いを実例と説明の中に指摘している。そこからセラピストは患者を人として理解するのに役だたせ、また患者の動きに注目しだしたセラピストの頭の中の整理にも本書は有益である。

専門的に医師心理学者とともに集団精神療法をするセラピストは、Ⅲ. 集団精神療法とはなにか？ の目標と分類からはいって、Ⅴ. 集団の構成の場所、集団の大きさ、治療者の数、時間、頻度、期限、費用、特殊

な技術を使うかどうかを読まれるようにおすすめする。

理学療法士・作業療法士として主に身体障害の患者治療をしているかたは、Ⅱ. 集団精神療法の発達 1. 慢性身体疾患に、Ⅵ. 治療の経過 7. 後期のいろいろの問題 a. 行動化、b. 非言語的コミュニケーション、d. 治療者の交代、Ⅸ. 集団精神療法の治療者の 1. 治療者の問題、治療者の訓練、3. 協同治療者の問題、が自分や同僚の治療的意味を理解したり反省するのに最適である。

豊富な臨床経験を日米の病院で持たれ、学究的態度と患者への深い愛情とで接しておられる著者の態度が、この本の中の各所で見受けられ、敬服の念を持たざるをえなかった。心の中にわだかまる治療上の疑問をいくつか解明してくれる本である。患者の治療のみならず、セラピストにどのように働いて貰うかというところで苦心する主任のかたにも一読をおすすめしたい。

(B5, 309 ページ, 図7, 2900円)

(東京リハビリテーション学院
鈴木明子)